

# 和のこころ

親鸞聖人のご和讃



龍谷大学教授  
 玉木 興慈  
 たま き こう じ

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

(註釈版聖典610ページ)

【現代語訳】

わたしたちをお救いくださる阿弥陀  
 仏のたいなる慈悲の恩徳と、教え導い  
 てくださる釈尊や祖師がたの恩徳に、  
 身を粉にしても骨を砕いても、深  
 く感謝して報いていかなければならな  
 い。

(現代語版『三帖和讃』163ページ)

いろんなご和讃

先日、ご門徒のお宅へお参りに寄せて  
 いただいた時のことです。お顔を見ると、  
 おでこに熱を冷ますシートを貼っておら  
 れたので、インフルエンザかな？ お風  
 邪かな？ と思っていると、視線を感じ  
 られたのか、「インフルじゃないですよ。  
 でも若さんにうつしたらいけませんから、  
 今日後はろに座りませんね」とおっしゃ  
 いました。一緒におつとめをされないこ  
 ともあって、その日は、いつもとは違  
 うご和讃を読ませていただきました。  
 そして、おつとめも終わり、部屋を出  
 て玄関についたところで、「今日はいつ  
 もと違うご和讃でしたね」と言われまし  
 た。隣の部屋で一緒におつとめをされて  
 いたのでした。有り難いことです。

玄関での立ち話でしたが、ご法事で  
 「浄土三部経」を読む時のご和讃や、「ら  
 いはいのうた」の時のご和讃、葬場勤行  
 の時のご和讃など、いろんなご和讃があ  
 ることをお話しすると、「また時々は違  
 うご和讃も聞かせてください」とおっしゃ  
 っていたいただきました。

浄土真宗ならではの

あらためまして、こんにちは。  
 このたびご縁をいただき、親鸞聖人の  
 ご和讃を、皆さまとともに拝読させてい  
 ただくこととなりました。先月号まで  
 「わたしの正信偈」を連載させていた  
 きましたが、今月からはご和讃です。

正信偈とご和讃は、私たちが親しんで  
 いる親鸞聖人のお言葉です。私たちに身  
 近なお聖教としてくださったのは、浄土

# 和

のころ  
親鸞聖人のご和讃

真宗・中興の祖といわれる本願寺第八代の蓮如上人です。

蓮如上人のご子息・実悟さまが著された『実悟記』によれば、蓮如上人の父の第七代の存如上人の頃までは、朝夕の主なおつとめは、善導大師の『往生礼讃』でした。『往生礼讃』は、大勢で上手に唱えることができれば、なんとも言えない荘厳な調べになりますが、なかなか容易なことではありません。

そこで蓮如上人は、文明五年（一四七三）に、正信偈と三帖和讃（浄土和讃・高僧和讃・正像末和讃）をワンセットと

して開版（印刷）されました。

善導大師が書かれた『往生礼讃』は、浄土真宗以外の宗旨でも読誦されますが、親鸞聖人が書かれた正信偈とご和讃は、浄土真宗以外の宗派では読まれることはないと思います。蓮如上人は、浄土真宗の門徒としてのつながり強く意識され、みなで読誦することの容易な「うた」として、正信偈とご和讃を選ばれたのではないかと思えます。

蓮如上人が定められた正信偈と三帖和讃は、蓮如上人の思われた通りに普及していきました。現在は、朝夕や日常のお

つとめとして、大切に、また親しみを持って拝読されています。

今もご本山のお晨朝では、正信偈に続いて和讃が六首ずつ繰り読みされています。およそ二カ月で三帖和讃を一通り拝読することができます。

## 三帖和讃について

親鸞聖人の著述は、漢語・和語のものをあわせて約二十部ほどあります。その中、漢語で記された『教行信証』が親鸞聖人の主著とされます。三帖和讃は「和語の教行信証」とも言われるように、和語で記された著述として、内容的にも分量的にも最も大部なものといえることができます。親鸞聖人が書かれた多くの和讃のうち、「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」を古来「三帖和讃」と呼んでいます

すが、宝治二年（一二四八）から文応元年（一二六〇）の十余年、すなわち親鸞聖人が七十六歳から八十八歳頃にわたって書かれたと考えられます。そもそも、和讃はどのような経緯で作られるようになったのでしょうか。平安時代に遣唐使が廃止される中、国風文化が隆盛しました。漢詩文に代わって和歌の制作が盛んとなり、従来の梵讃・漢讃に対して、和讃が制作されるようになりました。

梵語（サンスクリット語、インドの古語）の仏典にある伽陀（偈頌）を梵讃といえます。梵語で讃嘆されたものという意味です。それが中国に入って以降、漢文に訳され、著述されたものを漢讃といえます。さらに日本に入り、和語で表されたものが和讃です。

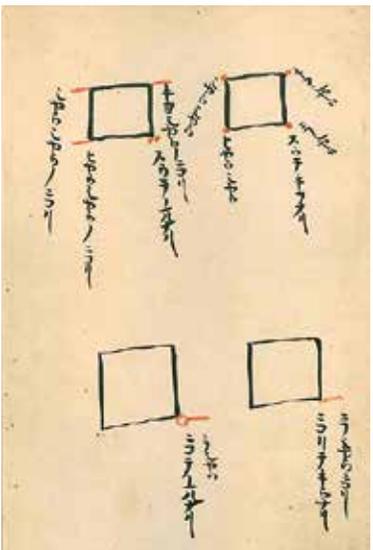
# 和のこころ

親鸞聖人のご和讃

親鸞聖人のお書物の中、正信偈などは漢讃とすることが出来ます。和語で表されたものが和讃です。歴代の仏教者の中にも和讃の制作は見られますが、親鸞聖人ほど多数のご和讃を作られた人は少ないと思います。親鸞聖人のご和讃の特徴は、厳密に四句をもつて一首とし（和讃は、一首・二首と数えます）、一句目の右肩に首番号を付けていること、美しい情感を帯びつつ、経・論・釈に基づき、繊細な教学理解を示していることなどが挙げられます。

和讃は、和語によって仏・高僧の徳を字の音韻についての親鸞聖人の感覚の鋭さを表すものということができます。親鸞聖人ご自身が実際に口ずさんでおられたのかもしれませんが。

三帖和讃に表された親鸞聖人の言葉に接する時、その言葉に込められた心を理解すると同時に、親鸞聖人の音声に学ぶためにも、和讃を声に出して読誦していただきたいものです。これから三帖和讃を通して、親鸞聖人が出遇われた世界を、共



平・上・去・入の四声や清濁緩急が図示された  
国宝本「浄土高僧和讃」II 専修寺蔵

讃嘆したのですが、真宗高田派のご本山・専修寺が所蔵される国宝本「浄土和讃」「現世利益和讃」の題目に「やわらげほめ」と親鸞聖人が訓釈されるように、漢語に対する和語というだけではなく、やわらかくほめ讃えた書ということが出来ます。

三帖和讃には、多くの漢字について、右側に音読を示す振り仮名が付けられ、左側には音訓や意味などが記されています。国宝本の「高僧和讃」には、平・上・去・入の四声や、清濁緩急の図が示されています。これを圈発といいますが、文

に味わっていきます。ご和讃のご文を声に出しながら、読み進めていただければと思います。

さて、三帖和讃の中で最もよく知られている和讃は、法要などでも歌われる「恩徳讃」だと思います。三帖和讃のうち「正像末和讃」におさめられている「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」（註釈版聖典610頁）という和讃です。

「身を粉にしても」「ほねをくだきても」とおどろおどろしく表現されますが、これは、私たちが自身のできる限りの報恩・謝徳の思い・行いをしたとしても、それで完全にし尽くしたとは決して思えないほどの広大な恩徳を讃嘆している表現だと思われれます。